

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月1日現在

機関番号：17102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820035

研究課題名（和文） 近代ドイツにおけるベートーヴェン作品の解釈と演奏の系譜：後期ピアノ・ソナタを例に

研究課題名（英文） Genealogy of interpretation and performance of Beethoven's works in modern Germany: Last piano sonatas as an example

研究代表者

西田 紘子 (NISHIDA HIROKO)

九州大学・芸術工学研究院・助教

研究者番号：30545108

研究成果の概要（和文）：

本研究は、難解とされてきたベートーヴェンの後期ピアノ・ソナタに関する19世紀以降のさまざまな解釈をとり上げ、作品解釈と、指づかいやフレージングといった演奏実践の関係を明らかにした。先行研究において「楽譜」中心主義、「原典」至上主義として位置づけられてきたハインリヒ・シェンカーによる後期ピアノ・ソナタ解釈と演奏指南を批判的に読み直すことで、当該テーマに関するこれまでの枠組みを再文脈化し、19世紀の「実用版」楽譜の立場も新たに歴史化した。

研究成果の概要（英文）：

This study examines the relationship between the interpretations of artworks and aspects of their practical performances, such as fingering, phrasing, and so on, focusing on Beethoven's last few piano sonatas that have been regarded as abstruse. By regarding the interpretations of the sonatas by Heinrich Schenker, who has been considered a typical advocate of the *Urtext* in preceding studies, this study aims to recontextualize the background regarding this theme and historicize the standpoint of the so-called practical editions in the 19th century.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：音楽学・音楽史・音楽理論・音楽美学・音楽分析・作品解釈・演奏

1. 研究開始当初の背景

(1) 演奏研究

近年、音楽学において演奏研究は盛んになりつつある。こうした趨勢は、西欧の音楽学が長らく「作品」を主な研究対象とし、「演奏」という実体の残りにくいものに関する研究が疎かにされてきたことへの反省から生じたものである。

演奏実践に関する国内の研究で筆頭に挙がるのは、従来の音楽学の「作品偏重主義」

を批判しつつ、演奏研究の地平を切り拓いた、渡辺裕による浩瀚な研究書『西洋音楽演奏史序説——ベートーヴェン ピアノ・ソナタの演奏史研究』（春秋社、2001年）である。ベートーヴェンのピアノ・ソナタを対象としている点や、欧米の研究を網羅している点で、本書の意義は大きく、この点で渡辺の書は、本研究の出発点となる。

(2) エディションの問題

ベートーヴェン作品の演奏史をとり上げるさい、避けて通ることのできない問題が、楽譜のエディション（校訂）の問題である。渡辺による先行研究は、ピアノ・ソナタの既存のエディションを網羅的に扱い、楽譜校訂者によって演奏指示等が楽譜に書き込まれている 19 世紀的な「実用版 praktische Ausgabe」と、自筆譜や筆写譜等の作曲者自身による一次資料に依拠し、校訂者による楽譜への書き込みを排した 20 世紀的な「原典版 Urtext」とを対比させた。そのうえで、後者がみせるイデオロギーを批判すると同時に、前者の意義を再考している。その文脈において、本研究が対象とするハインリヒ・シェンカー (Heinrich Schenker, 1868-1935) は、後者のタイプのエディション、つまり原典版を出版した最初期の音楽家として、19 世紀的な実用版を除き、作品自体の構造から普遍的な演奏法を導き出さんとする「本質主義者」の典型として捉えられている。

(3) シェンカーと原典主義

だが、実際のところ渡辺は、シェンカーをそのように位置づけながらも、その本質主義・普遍主義の実際については軽く言及するにとどまり、詳論はしていない。確かにシェンカーは、19 世紀的な実用版の代表的校訂者ハンス・フォン・ビューロー (Hans von Bülow) を非難し、作曲者の自筆譜に基づく原典版を構築し、普及させようと努めたことは事実であり、ニコラス・クック (Cook, Nicholas, “Heinrich Schenker and the Authority of the Urtext,” *Tradition and Its Future in Music*, edited by Tokumaru Yoshihiko et al. Osaka: Mita Press, 1991, 27-33; “Heinrich Schenker, Polemicist: A Reading of the Ninth Symphony Monograph,” *Music Analysis* 14 (1995): 78-105.) などの欧米の研究者も、別のジャンルの作品についてはあるが、この点を指摘している。

とはいえ、シェンカーが著した『ベートーヴェンの最後の 5 つのピアノ・ソナタ』(1913~1921 年) については、シェンカーの著書をいち早く英訳してきたアメリカにおいてもいまだ英訳は出版されておらず、じゅうぶんな研究がなされていないのが現状である。そのため、シェンカーやその周辺の人物の言説と楽譜テキストを精確に読み解き、その背景にある特徴を明らかにし、それによって 19 世紀から 20 世紀初頭にかけての作品解釈史ならびに楽譜校訂、そして演奏実践の歴史を再文脈化していく必要があると考えた。

2. 研究の目的

(1) 一次資料の調査・分析と翻訳

日本において、西欧芸術音楽がより深くかつ多様な形で受容されるために、シェンカーの音楽作品論をはじめとするドイツの音楽理論書・音楽作品論を日本語で読めるようにすることには、大きな意義がある。まずは、シェンカー著『ベートーヴェンの最後の 5 つのピアノ・ソナタ批判校訂版』(1913~1921、op. 109, 110, 111, 101 の 4 作を出版) を翻訳することが本研究の目的のひとつである。同時に、この作業には、自筆譜や筆写譜の綿密な調査が不可欠であり、これが本研究の次の目的となる。

俯瞰すれば、これら個別の対象に関する翻訳や調査・分析を通して、当該対象を中心に 19 世紀から 20 世紀初頭にかけての作品解釈史・演奏史を明らかにするということが、本研究の大きな目的である。

(2) 作品解釈史やエディション史の見直し

こうした目的意識に基づき、作品解釈法とそれに基づいた演奏法との関係という視座から、本研究は、シェンカーのピアノ・ソナタ解釈に新たな側面を発見することを目指す。シェンカーは、前代の 19 世紀的な音楽家たちの解釈法について鋭く批判しているものの、解釈と演奏の関係については、「19 世紀対 20 世紀」という対立図を安易に用いるべきではないと考えられるからである。

(3) ピアノ・ソナタというジャンルの独自性

とくにピアノ・ソナタのジャンルでは、たいていは楽譜校訂者がピアノ奏者であるため、作品の構造的解釈だけでなく、指づかいやフレーズといった演奏に直接関係する問題が論じられ、また楽譜テキストに指示が書き込まれる。このため、演奏指南としての要素が強くなり、この点でオーケストラ作品とは異なる独自性が楽譜と演奏との関係に生じる。例えばシェンカーは、ピアノ・ソナタ校訂版において、前代の実用版と同じように、指づかいや必要な注釈を補っているという点で、原典資料の単なる再現ではなく、一定の解釈を含んだ楽譜を構築している。このような点に留意してみると、上記の研究目的は、解釈・演奏史における従来の「19 世紀対 20 世紀」という対立図にとらわれず、それを超えるような視座を提示できるだろう。

3. 研究の方法

(1) さまざまなエディションの比較と音楽作品論の翻訳

シェンカー著『ベートーヴェンの最後の 5 つのピアノ・ソナタ op. 109 批判校訂版』

(1913) の翻訳作業を軸とし、彼の言説と楽

譜テキストとの関係を考察する。その作業のなかで生じるさまざまな音楽学上の問題を検討し、考察を加えていくことが、本研究の中心をなす方法論である。

(2) 専門性と学際性

これまでに得た音楽学を専門とする研究者や演奏家を研究協力者ならびに共訳者として、複雑なエディション問題にとりくむ。のみならず、ドイツ語に関する問題については、とりわけ19世紀や20世紀初頭の批評的文体は難解であるため、同時代・同地の独文学を研究しているドイツ語の専門家に適宜相談することで効率的に研究を進め、翻訳書を出版すると同時に口頭発表ならびに論文投稿を重ねた。

(3) 楽譜テキストの諸要素のデータ化

作品解釈と演奏実践の関係をデータ化する作業を継続的に行う。近年、演奏実践に対する理系的・統計学的アプローチが盛んになりつつあることに鑑み、研究代表者の研究環境および人材に助力を求め、楽譜テキストにおける諸要素のうち、とくに指づかいをデータ化して、エディション間の比較を試み、その特徴を分析した。これによって、従来の研究史における価値観を、数値等の手段を用いてより明示的に補強あるいは反論していくことが可能となる。

(4) 他ジャンルとの比較

本研究では、とくにピアノ・ソナタというジャンルをとり上げるが、その独自性を考察するために、比較対象としてベートーヴェンの交響曲やドイツ語圏の作曲家の歌曲といった他ジャンルの作品解釈にも目を配る。これは、ピアノ・ソナタへの解釈アプローチの独自性を考察するためには不可欠な作業である。

(5) ほかの音楽家との比較

本研究は、主としてシェンカー風分析 (Schenkerian analysis) の創始者であるハインリヒ・シェンカーの思想に着眼しているが、比較対象として、前代・同時代のドイツ語圏諸国において活動した音楽理論家 (ハンス・フォン・ビューロー、フーゴー・リーマン Hugo Riemann、オイゲン・ダルベール Eugen D' Albert など) の思想や楽譜校訂の実践、演奏指南の実際との比較を通して、当時の思想図をダイナミックに描いていくこととした。

4. 研究成果

(1) 総括：本研究の独自性

以上のことから本研究は、一次資料の調査・分析、とりわけ楽譜校訂作業の比較というこれまでの正統的な音楽学研究の系譜の延長に位置しながら、音楽学内部にとどまらない学際性を有する、演奏研究に一石を投じるような研究になったといえる。

(2) 一次資料・文献の分析

シェンカーの時代における楽譜校訂者による作曲者の一次資料へのアプローチと、現代の音楽学による一次資料へのアプローチは、1世紀に及ぶ時代の差があるため、量的にも質的にも当然ながら異なるものとなる。したがって、本研究では、出版当時は需要があったものの現代日本では入手することのできないエディションや、手紙等の一次資料を数多く扱い、シェンカーの時代の言説に沿って丹念に内容をたどりつつ、当時の価値観を分析した。この作業のために、ドイツ・オーストリアを中心に資料調査を行い、19世紀の中古楽譜を収集して回った。収集した楽譜資料は、詳細に読み解き、翻訳や研究作業の基礎素材とし、研究の実証性を高めている。

(3) さまざまなエディションの分析

19世紀から20世紀初頭にかけて出版されたベートーヴェンのピアノ・ソナタのエディションのうち、ビューロー版、リーマン版、ダルベール版、シェンカー版の4つを主にとり上げて、その異同を明らかにした。ビューロー版とダルベール版はいわゆる実用版に属す一方、リーマン版はリーマンの構造解釈が書き込まれたいわば分析版である。それに対してシェンカー版は、校訂者の介入を可能な限り排した批判校訂版である。これらのエディション間にみられる類似や相違が、校訂者の思想的背景とどのように関連づけられるのか、あるいは関連づけられないのかを明らかにし、作品解釈史や演奏史の歴史化を試みた。

(4) シェンカーの演奏指南の多様性

シェンカーは、交響曲ジャンルの解釈においては絶対音楽的な専門的解釈を徹底させていたが、ことピアノ・ソナタのジャンルにおいて、とりわけ演奏指南の面では構造主義者としてのシェンカー像にはそぐわない多様な姿勢をみせていることが判明した。なかでも指づかいの指示を調査した結果、指の動きによって構造を可視化しようとする傾向と並んで、楽譜には内在していない「効果 Wirkung」を奏者が表現・表出できるようにするための指づかいが指示されており、またショパンの指づかいの伝統に属すると推測される慣習に基づく指づかいも数多くみら

れた。したがって、シェンカーの演奏指南については、楽譜に内在するレベルにとどまらない、身体性にまでまたがる記号論的図式を用いて考察する必要性があることを論じた。他方、演奏指南の内容を、演奏流派の伝統とどれほど関連づけられるのかについては、今後の課題である。

また、シェンカーが生涯にわたって批判し続けた19世紀の実用版の校訂者であるビューロー版と、シェンカー版を比較したところ、指づかいについては類似性もおおいに観察され、この点では従来の対立図に収れんさせることのない、より詳細な考察が必要であることを指摘した。

(5) 作品解釈の特徴と校訂実践との関係
エディションの実践を分析することと並んで、シェンカーや周辺の音楽家がピアノ・ソナタやその他のジャンルの作品をどのような価値観のもとに解釈していたかについて、主として物語論の概念を応用して分析した。

また、この作品解釈が、楽譜校訂の実践とどのように関連しているかについて考察し、口頭発表を行った。

(6) 国内における成果発表
シェンカー研究が欧米に比べて進んでいない日本においては、口頭研究発表と論文投稿を通して、シェンカーを広く思想史に位置づけた。同時に、英訳もまだなされていない『ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第30番 op. 109 批判校訂版』の翻訳出版を通して、広く音楽愛好家や専門的な音楽家、演奏家に、新たな音楽受容の機会を提供することができた。

(7) 海外における成果発表
海外においては、シェンカー研究者や国際的に活躍する音楽分析・理論の専門家が集う学会で口頭発表を重ね、より専門的な学術誌に論文を発表している。これらによって、日本で行われている当該分野の最新の動向を紹介することができたと同時に、シェンカー研究者や音楽理論の専門家との知己を得、今後の研究活動のためのネットワークを構築することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① NISHIDA Hiroko, “Narrativity in Heinrich Schenker’s Interpretations in Musical Works,” *Journal of Schenkerian Studies* (査読有) 6, 2012,

67-91.

- ② NISHIDA Hiroko, “Heinrich Schenker’s ‘Intramusical’ Hermeneutics: A Comparison of the Hermeneutics of Hermann Kretzschmar and Wilhelm Dilthey,” *Aesthetics* (査読有) 16, 2012, 53-65.

[学会発表] (計3件)

- ① 西田絃子、「ハインリヒ・シェンカーによる運指法の特徴——『ベートーヴェンの最後のピアノ・ソナタ批判校訂版』を例に」、日本音楽学会第63回全国大会、2012年11月24日、京都。
- ② NISHIDA Hiroko, “Heinrich Schenker’s verbal associative narrative and Umlinie narrative,” *EUROMAC VII: European Music Analysis Conference*, 2011, September, Italy, Rome.
- ③ NISHIDA Hiroko, “Instructing how to interpret Beethoven’s last Piano Sonatas around the Turn of the 20th Century,” *Current Musicological Scene in East Asia, Celebrating the Foundation of East Asian Regional Association of The International Musicological Society*, 2011, September, Korea, Seoul.

[図書] (計1件)

- ① 山田三香・西田絃子・沼口隆訳、ハインリヒ・シェンカー著、音楽之友社、『ベートーヴェンの最後のピアノ・ソナタ第30番 op. 109 批判校訂版——分析・演奏・文献』2012年、全165頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西田絃子 (NISHIDA Hiroko)
九州大学芸術工学研究院・助教
研究者番号：30545108